

実践研究事業報告書

連携・協働による SDGsと探究的な学びを促進する 教育プログラムの研究 ～ 中学生版探究学習のモデル的实践 ～



令和7年3月

1. 国立中央青少年交流の家の歴史

「国立中央青少年交流の家」（当時は、「国立中央青年の家」）は、皇太子殿下（上皇陛下）御成婚記念事業の一つとして、1959 年（昭和 34 年）に開設された我が国最初の国立青少年教育施設である。1958 年（昭和 33 年）7 月、駐留していたアメリカ軍の東富士演習場ノースキャンプでレクリエーションセンターとして使用されていた施設が返却されることになった。この時、御殿場市に住み、米軍当局と地元民との交流にご尽力されていた根上ツナさんが、「清浄と平和を象徴している美しい富士山の下に、世界平和を世界の青年に訴える場として国際的文化センターをつくることが私たちの願いです」（一部略）と、声をあげた。その根上ツナさんの思いが御殿場市長を動かし、静岡県知事を動かし、そして、当時の岸総理大臣に届き、「国立中央青年の家」が誕生した。当施設は、「体験活動を通した青少年の自立」をテーマに、様々な体験活動の機会を提供する中で、青少年一人ひとりの成長・発達を促し、その自立と社会性の涵養を目指している。

2. 研究の背景

国立青少年教育振興機構は、第 3 期教育振興基本計画（平成 30 年 6 月 15 日閣議決定）や「人口減少時代の新しい地域づくりに向けた社会教育の振興方策について（答申）」（平成 30 年 12 月 21 日）等の国の青少年教育行政に関する基本方針を踏まえ、ナショナルセンターとして、次代を担う青少年の自立に向けた健全育成を総合的に推進していくことが求められている。その際、青少年が社会の担い手となることを支援する拠点としての役割や、「社会に開かれた教育課程」の実現に向けた学校との連携強化を図る観点も重要であると考えられている。また、今後の地域における社会教育が目指す役割として、人づくり・つながりづくり・地域づくりの側面が示されており、学びと活動の循環が重要とされている。

近年、生産年齢人口の減少、グローバル化の進展や絶え間ない技術革新等により、社会構造や雇用環境は大きく、また急速に変化しており、予測困難な時代を迎えようとしている。

このような時代にあって、子供たちが様々な変化に積極的に向き合い、他者と協働して課題を解決していくことや、様々な情報を見極め知識の概念的な理解を実現し情報を再構築するなどして新たな価値につなげていくことが求められている。

平成 29 年 3 月の学習指導要領の改訂においては探究的な学習の過程を一層重視し、各教科等で育成する資質・能力を相互に関連付け、実社会実生活において活用できるものとするとともに、各教科等を越えた学習の基盤となる資質・能力を育成することを基本的な考え方としており、その実現に向けて、探究的な学習における 4 つのプロセス（課題の設定、情報の収集、整理・分析、まとめ・表現）の質的充実が求められている。

3. 本研究の趣旨

中央青少年交流の家では、教育テーマを「SDG s と探究的な学びへの理解を深め、持続可能な社会の担い手をはぐくむ」とし、青少年に関するモデル事業（探究学習等）の推進を重点に掲げ、研究の仮説を「地域課題の解決策を中学生の視点で考え、実践することにより、課題解決力を養うとともに、持続可能な社会づくりに向けて貢献できる人材の育成を図ることができる。」とし、中学生を対象とした探究学習のあり方を研究することとした。

■事業のねらいと身につけたい力

○課題解決力を養う

➡他者と協働して主体的に課題を解決する力

○持続可能な社会づくりに向けて貢献できる人材を育成する

➡SDG s を自分事として捉えて行動する力



自己有用感・自己肯定感を高める

4. 仮説に迫る手立て

【令和3年度の取組】

- ①探究的な学びを進めていく上での心構えを学ぶ。
- ②課題解決型の野外炊事やグループワークを通して、情報のまとめ方やアイデアの出し方を学ぶ。
- ③地域づくりの実践家の講話を聴き、地域づくりへの関心と意欲を高める。
- ④フィールドワークを通して、地域の魅力や課題について考察する。
- ⑤地域課題の解決策（仮説）についてアイデアを出し合う。
- ⑥仮説を検証するためにインタビュー等を行い、疑問点の確認と有効な改善策を探る。
- ⑦交流の家の活動プログラム「SDG s ミッションウォークラリー」を行い、SDG s について理解を深める。
- ⑧講義・グループワークを通して、SDG s の視点でまちづくりを考える体験をする。
- ⑨情報発信の手法の1つとして、動画作成について学び、スマートフォンやタブレットを用いて30秒の動画を作成する。
- ⑩自分のまちを元気にするための取組計画を考える。
※「課題設定」➡「仮説」➡「取組計画立案（5W1Hの視点で考える）」
- ⑪取組計画に沿って参加者各自で準備を進める。
- ⑫「まちを元気にするための取組」を実践している大学生の発表を聴き、プレゼンテーションのイメージをもつ。
- ⑬「自分のまちを元気にするための取組計画」について発表し、協力者からフィードバックをもらう。
- ⑭来場する子供や家族にSDG s について知ってもらうために、「オープンハウス2021」でのブース出展を企画し、事前の準備から当日の運営までを行う。



グループワーク（KJ法）



地域めぐり



動画づくり

【令和4年度の取組】

- ①昨年度、地域探究プログラムに参加した高校生の講話を聴き、地域づくりへの関心と意欲を高める。
- ②フィールドワークを通して、地域づくりに関する活動を体験し、地域が抱えている課題や魅力について考える。
- ③フィールドワークを通して感じた地域課題の解決策（仮説）についてアイデアを出し合う。
- ④仮説を検証するためにインタビュー等を行い、疑問点を確認したり、より有効な改善策を探ったりする。
- ⑤交流の家活動プログラム「SDG s ミッションウォークラリー」を体験し、その魅力や課題について考える。
- ⑥今までの学びをもとに、新たに SDG s ミッションウォークラリーのお話カードを作成する。
- ⑦来場者に対して SDG s ミッションウォークラリーを提供するために、役割分担をして準備を行う。
- ⑧交流の家の教育事業「クラフトマーケット～Xmas ファミリーday～」で来場者へ SDG s ミッションウォークラリーを提供する。
- ⑨来場者に向けてアンケートを実施し、結果や参加者の取組の様子を参考に仮説の検証を行い、成果や課題についてまとめる。
- ⑩協力者からプレゼンテーションの基本について学び、プレゼンテーションの準備を行う。
- ⑪プレゼンテーションを行った後、協力者からフィードバックをもらい、これまでの学びをさらに深める。



グループワーク



SDG s ミッションウォークラリー



クラフトマーケット

【令和5年度の取組】

- ①高校生地域探究プログラムの活動例をもとに探究のプロセスについて学ぶ。
- ②市内にある製茶工場へフィールドワークに行き、茶摘みや茶もみ体験を行う。
- ③フィールドワークを通して、茶業の魅力や課題を考え、魅力発信や課題解決の方法について考える。
- ④御殿場市都市建設部都市整備課と連携し、御殿場駅周辺のまちづくりの協力依頼をもらう。
- ⑤参加者全員でグループ分けを行い、活動内容や日程を話し合う。
- ⑥情報交換会を行い、各グループの活動進捗状況を伝え合うとともに、アドバイスの意見交換を行う。
- ⑦各グループのテーマについて共通理解を図る。

- ⑧駅周辺で行われたイベントに参加し、来場者に対してアンケートやインタビューを実施する。
また、駅周辺の実地調査と情報収集を行う。
- ⑨グループごとに資料や発表原稿の作成に取り組む。
- ⑩実践活動発表会として、御殿場市都市建設部都市整備課の方や学校の先生、保護者に向けて「御殿場駅周辺のまちづくり」についてのプレゼンテーションを行う。



フィールドワーク（茶業）



御殿場市都市整備課からの依頼



イベント（駅まえ〜）

【令和6年度の取組】

- ①高校生地域探究プログラムの活動例をもとに探究のプロセスについて学ぶ。
- ②NP0 法人みらい建設部へフィールドワークに行き、竹の伐採や竹細工、メンマづくりを体験するとともに、地域が抱える課題について学ぶ。
- ③フィールドワークを通して放置竹林の問題を考え、魅力発信や課題解決の方法について考える。
- ④御殿場市都市建設部都市整備課と連携し、御殿場駅周辺のまちづくりの協力依頼をもらう。
- ⑤参加者全員でグループ分けを行い、活動内容や日程を話し合う。
- ⑥株式会社エフエム御殿場の方に協力していただき、「プレゼンテーションの技法」として、声の出し方や言葉の伝え方について学ぶ。
- ⑦ランドブレイン株式会社の方と連携し、「プレゼンテーション資料作り」として、文字の色や言葉の使い方など、相手に伝わる資料作成の方法について学ぶ。
- ⑧駅周辺で行われたイベントに参加し、来場者に対してアンケートやインタビューを実施する。
また、駅周辺の実地調査と情報収集を行う。
- ⑨グループごとに資料や発表原稿の作成に取り組む。
- ⑩実践活動発表会として、御殿場市都市建設部都市整備課の方や学校の先生、保護者に向けて「御殿場駅周辺を盛り上げるための取組」についてのプレゼンテーションを行う。



講話・演習



イベント（寄り道マルシェ）



実践活動発表会

5. 効果測定の方法

(1) 事業参加者変容の客観的評価（6段階のアンケート，リフレクションシート）

①観察法

- ・観察項目として，以下の7点を設定した。
 - A 主体的に取り組んでいる。
 - B 協働的に学んでいる。
 - C 理論的に思考したり，多面的・多角的な視点から思考したりしている。
 - D 根拠を基に適切に判断している。
 - E 自分の考えや思いを周囲に伝えることができています。
 - F 思考や行動に汎用性がある。
 - G 思考・判断する際に，SDG s の視点を持っている。

②アンケート

- ・アンケート項目として，大項目8×小項目2＝16項目を設定し，各項目においては，「とてもよくあてはまる」と「まったくあてはまらない」を両端とした，6段階（1～6点）の間隔尺度となっている。
 - A 主体性
 - ・物事を前向きに考え，行動することができる。
 - ・見通しを立て，自分で計画を立てられる。
 - B 協働性
 - ・人の意見を聞いて，自分の考えを深めることができる。
 - ・ゴール（目標）に向かって，仲間と協力して進むことができる。
 - C 思考力
 - ・筋道を立てて考えることができる。
 - ・いろいろな視点から物事を考えられる。
 - D 判断力
 - ・いろいろな情報を整理してより良いものを選ぶとする。
 - ・根拠を基に判断することができる。
 - E 表現力
 - ・話し合いの場では，自分の意見が言える。
 - ・自分の考えを，うまく伝えることができる。
 - F 汎用性
 - ・学んだことを応用して発揮することができる。
 - ・知識をいろいろな機会に活用できる。
 - G SDG s の視点
 - ・SDG s について関心を持っている。
 - ・SDG s の目標達成のために，意識して取り組んでいる。

H 自己有用感

- ・自分は人の役に立っている。
- ・自分のことが好きである。

6. 結果・考察

■アンケート結果より

事前・事後アンケート結果		令和3年度		令和4年度		令和5年度		令和6年度	
		前	後	前	後	前	後	前	後
物事を前向きに考え、行動することができる	主体性	4.8	5.3	4.1	5.1	5.2	5.5	5.0	5.8
見通しを立て、自分で計画を立てられる	主体性	4.5	4.7	5.0	5.4	5.2	5.5	5.0	5.8
人の意見を聞いて、自分の考えを深めることができる	協働性	4.9	5.2	4.3	5.1	5.2	5.5	5.4	5.6
ゴール（目標）に向かって、仲間と協力して進むことができる	協働性	5.0	5.5	5.0	5.3	4.3	4.8	4.9	4.9
筋道を立てて考えることができる	思考力	4.5	4.9	4.6	5.1	4.3	4.8	4.9	4.9
いろいろな視点から物事を考えられる	思考力	4.9	4.7	4.3	5.1	5.2	5.8	4.9	5.4
いろいろな情報を整理してより良いものを選ぶことができる	判断力	4.9	5.3	5.0	5.8	4.8	5.2	4.9	5.4
根拠を基に判断することができる	判断力	4.6	4.9	4.0	5.1	5.1	5.3	5.1	5.4
話し合いの場では、自分の意見が言える	表現力	4.9	4.9	4.0	5.1	5.2	5.8	5.1	5.8
自分の考えを、うまく伝えることができる	表現力	4.1	4.5	4.8	5.4	4.3	5.0	5.3	4.6
学んだことを応用して発揮することができる	汎用性	4.3	4.9	4.5	5.4	4.6	5.2	5.1	5.4
知識をいろいろな機会です活用できる	汎用性	4.5	4.9	4.6	5.5	4.8	5.3	5.1	5.6
SDGsについて関心を持っている	SDGsの視点	4.9	5.6	4.6	5.1	5.1	5.3	4.6	5.6
SDGs達成のために、意識して取り組んでいる	SDGsの視点	4.8	5.4	4.5	5.6	4.7	4.9	4.4	5.5
自分は人の役に立っている	自己有用感	4.5	4.6	5.1	5.6	4.7	5.1	5.3	4.6
自分のことが好きである	自己有用感	4.9	4.9	4.0	5.0	4.1	3.9	4.6	4.6

大項目（12）		令和3年度		令和4年度		令和5年度		令和6年度	
		前	後	前	後	前	後	前	後
主体性		9.2	10.0	9.1	10.5	10.4	11.0	10.0	11.5
協働性		9.9	10.7	9.9	10.4	9.6	10.3	10.3	10.5
思考力		9.4	9.6	9.4	10.3	9.6	10.7	9.8	10.3
判断力		9.5	10.2	9.5	10.9	9.9	10.5	10.0	10.8
表現力		9.0	9.5	9.0	10.5	9.6	10.8	10.4	10.4
汎用性		8.8	9.8	8.8	10.9	9.3	10.4	10.3	11.0
SDGsの視点		9.8	11.0	9.8	10.8	9.8	10.3	9.0	11.1
自己有用感		9.4	9.6	9.4	10.6	8.8	9.0	9.9	9.3

表1 アンケート結果

参加した中学生の実態にもよるが、どの年度においても8項目中「主体性」「協働性」「思考力」「判断力」「表現力」「汎用性」「SDGsの視点」の7項目において向上が見られた。一方、「自己有用感」については、令和6年度に低下傾向が見られた。その要因としては、意欲の高い生徒がグループのメンバーを引っ張る一方、他の生徒はその生徒に依存することとなり、自分の役割を果たしきれない面があったことにあると考える。一方では、「主体性」や「SDGsの視点」が大幅に向上しており、その要因として、令和5年度から連携している御殿場市都市建設部都市整備課に対してプレゼンテーションした内容が採用され、駅前に「きよてんば」という交流のスペースが設置されたことがある。自分たちが行う探究活動が実際に地域で生かされるという希望をもつことができ、ゴールを見据えた意欲的な行動が促されたものとする。

■行動観察（令和6年度に実施）より

	自他との関わり方	自ら考え判断し行動すること	自分の言動に責任を持つこと	探究活動への関心・意欲	情報収集・分析・発信
	コミュニケーション 思いやり 傾聴	主体性 積極性 非依存	決断力 課題解決能力 役割遂行能力	計画性 課題発見能力	資料作成 プレゼンテーション
第1回(7/13)	・軽口を言って全体の雰囲気盛り上げる。一方で少しうさがられているところもある。(A) ・フィールドワークで一緒になった高校生と自然に会話していた。(B) ・自分の関心事に集中して周りの様子が目に入っていないかったが、それが終わると仲間の手伝いに向かった。(A) ・隙間の時間ができるとすぐにスマホに熱中する。(3名) ・クレンザーをつけた鉄板を動かし洗って洗ってしまった仲間を責める。(A)	・フィールドワークの際に虫除けスプレーを持って行くことを提案。(A) ・自己紹介シートの写真撮影を買って出る。(A) ・昨年度の最終発表の内容をあまり思い出せない様子だったが、スタッフの話を聞いて少しずつ思い出してきた。(3名)	・竹の伐採を最後まで一人でやり遂げる。(A) ・野外炊事の際、面倒な仕事を押し付けあう傾向が見られた。(3名) ・メンバーを増やすためのアイデアを出す。(内申書にプラスになることをアピール(G)、インスタグラムに上げる(B))	・竹での工作に熱中する。(B, A) ・切り出した竹を尺八に見立てて音を出していた。(C) ・作り上げたものに愛着が芽生える。(A) ・フィールドワークを終えての疑問や感想が多く出た。(切った竹はどうしているのか(B)) ・メンマの味付けに不満 (C) ・メンマづくりが広まらないのはなぜかと疑問に思う(A) ・メンマが筍ではなく幼竹からつくられていることにびっくりした(B)	・振り返りシートの記入が進まない。1行くらいしか書かれていなかったが、スタッフが感想を引き出すような声掛けをすると少し具体的に書けるようになった。(3名)
第2回(7/14)	・朝食時、仲間やスタッフを気遣い食事を取りに行こうとする。(A) ・食堂の人に気持ちの良い挨拶ができている。(3名)	・グループワークのワークシートを率先してまとめる。(B) ・講義中の姿勢が悪く、机に寄りかかったりゴソゴソ動いたりしている。(A) ・プロジェクターのスイッチを切ってくれた。(A)	・フィールドワークの講師に自分の感想をしっかりと話すことができた。(B, A)		・スタッフのサポートを得て何とか二人でまとめる。練習する時間がなく、ぶっつけ本番の発表になったが、やり終えることができた。(B, A)
第3回	・初参加にもかかわらず、はきはきと話している。(E子) ・声が聞き取りづらいと、講師から何度か指摘を受けていた。(D)	・グループワークの進行役を率先して担う。(A, B)	・グループ分けの際に、自分の意思を明確に表示できていた。(6名)	・講師の投げかけに積極的に反応していた。(C, B)	
自主 (11/30,12/1)	・プレゼン案に対する職員の助言を真摯に聞いていた。(全員)	・書記(ホワイトボードへの書き出し)を買って出る。(B, F子) ・アンケートの分析を行う。(D) ・「馬肉祭り」のアイデア出しをリードする。(F子)			・担当部分の発表原稿を自身で作成する。(全員) ・プレゼンテーション資料を作成する。(B, E子)

表2 行動観察による客観的評価

中学生 A は、多動傾向で他者との円滑なコミュニケーションが困難であった。他のメンバーからはうるさがられる面もあったが、グループワークを重ねる中で互いの知識や技能を共有し、互いを認め合うようになったことで、互いの距離感を考えながらコミュニケーションがとれるようになっていた。どの中学生も探究活動を重ねるごとにお互いを思いやる面や他者の為に頑張ろうとする面が見られるようになっていた。

普段関わる事のない他校生徒との活動が、他者とのコミュニケーションの取り方を考えるきっかけになったり、自分なりの使命感を高める要因になったりと、グループのメンバーと協働して探究活動に取り組むことで、消極的な態度が積極的に変化していった。

7. 実践研究の成果と課題、今後の展望

(1) 事業後のリフレクションシートより（参加者の感想）

- ・グループワークやフィールドワークを通して、他人の考えを親身に聞くことができるようになったり、地域への理解を深めたりすることができるようになった。
- ・中学会議所を通して、課題を見つけ解決する楽しさを知ることができた。
- ・地域課題解決に向けて、どのような活動をしたらいいのか、どのような工夫をするといいのかを学ぶことができた。
- ・地域について考える楽しさを知ることができた。

- ・意見を発表したり，自分の考えをうまく伝えられるようになったりした。
- ・データの集め方や活用の仕方を学ぶことができた。また，いつもとは違う環境で，他者と学ぶことや人前で話すことに慣れることができた。
- ・今回学んだことを活かして，高校でも自分の住んでいるまちの魅力を伝えたいと思った。
- ・仲間と考える大切さや仲間と協力する大切さを知った。

（２）成果と課題，今後の展開に向けた留意点

①成果

- ・行政や企業と連携することで，フィールドワークやグループワークなど，多様な体験活動の機会を設定することができ，様々な方との出会い，交流が，中学生の学びを一層深めることにつながった。
- ・高校生の地域探究プログラムと一緒に活動することで，探究活動への意欲が向上するとともに探究のプロセスを学ぶことができ，探究活動への見通しをもつことができた。
- ・行政と連携し，テーマやゴールを設定したことで，探究活動への意欲付けと他者との協働を促進するきっかけとなった。

②課題

- ・地域の違う中学生との活動は，日程調整が難しく活動を進めることが困難であった。
- ・体験活動を通した学びについては，欠席者へのフォローを工夫する必要がある。
- ・探究のプロセスを学ぶためには，高校生とともに活動することやフィールドワークは効果的ではあるが，課題に対してより自分事として捉えさせるためには，テーマに合った活動の場や実体験を多く設定する必要がある。

③中学生版探究学習のプログラム化に向けた留意点

- ・行政や企業，地域との連携体制は一朝一夕に構築できるものではない。一定年数継続とともに活動する機会を積み重ねていく中で，信頼関係を醸成していくことが重要である。
- ・高校生とともに活動した今回のケースのように，異なる年齢集団による学び合いは双方にとって効果的である。

８．研究協力員から

（１）自治体・地域との連携・協働に基づく探究学習の可能性

静岡大学特任教授 阿部 耕也

宿泊体験を伴う交流機会を提供する社会教育施設が，日頃の地域との様々な連携・協働を活かして練り上げた本事業は，複数の地域・学校・学年からの参加という特徴も相まって，多様な参画者との連携・協働・交流のつくり方・深め方に大きな特徴がみられる。アンケート結果や行動観察等が示すように，参加者には様々な肯定的変化が見られたが，その多くは自治体や地域の事業者・団体等との連携・協働に基づくプログラム／活動に下支えされている。そうした連携・協働は本事業以前から培われたものだが，同時に，御殿場市からの課題提案から中学生による提案

「きよてんば」が実現した流れに見るように、「中学会議所」を継続的に実施することによって、連携・協働が深まるというサイクルも生まれている。

また、中学会議所の取組においては、連携・協働が形式的なものにとどまらず、地域から提案された具体的な課題の解決に向けて協働することを通して、探究的な学びが深まっている。「社会に開かれた教育課程」実現のための要素は様々指摘されているが、社会への窓口を形式的に「開く」だけでなく、具体的な連携・協働に基づいて教育課程をともにつくり合うプロセスが重要であると考えられる。

教育事業の評価は、参加者の変化・成長という視点が主となるが、事業をめぐる連携・協働の広がり・深まりという視点もある。活動報告にみるように、施設および学校を支える地域のネットワークが年々拡張し、また各々の関与の度合いが深まっており、そのことが中学生の探究的な学びのより良い環境を提供していると評価できる。

連携・協働という横の広がりとその深化という視点のほかに、縦の接続という視点もある。中学会議所および高校生探究プログラムにおいては、前年度の参加者が次回の事業を支えるサイクルができつつある。以前のプログラムで報告者だった高校生が、次のプログラムでは新たな参加者に向けてプレゼンする発表者になったり、サポーターとなったりしている。交流の家では、様々な事業に参加した青少年がその後ボランティアやサポーターとして参与する場合が多くあるが、探究的な学びのプログラムにおいてもそれがみられる。

「中学会議所」は探究学習のモデル的实践であり、学校でのプログラム作成・実践に有用な示唆となる取組だが、参考とするさいには留意したい点もある。本事業の特徴の一つは、御殿場市からの課題提案、参加中学生による解決策提示、御殿場市による施策化という創造的なサイクルができたことである。この一連のサイクルは探究学習の各プロセスの質的充実をもたらし、また参加者のモチベーションと達成感につながっている。令和5年度から結実したこうした取組は、令和3年度から積み上げられてきた連携・協働の蓄積から生まれたものであり、中学生の取組を見てきた御殿場市担当課が中学会議所プログラムとその参加者を信頼し託した課題であった。実現への経緯や蓄積を無視して、学校と地域が困難な課題を設定したり、解決策の実現を約束することはまた別の問題を生む危険性がある。「中学会議所」事業の取組・プロセスの全体を読みとっていただければ幸いである。

地域における社会教育が目指すべき役割として、人づくり、地域づくり、つながりづくりという側面が指摘されるが、中学会議所の取組においては、三つの側面が互いに欠かせないピースとなっている点も注目され、今後のさらなる展開が期待される。

（２）これからの実践研究の在り方についてー研究方法の観点からー

東京家政大学教授 白木 賢信

本研究事業の成果として挙げられた、「グループワークやフィールドワークを通して、他人の考えを親身に聞くことができるようになった」「意見を発表したり、自分の考えをうまく伝えられるようになったりした」「仲間と考える大切さや仲間と協力する大切さを知った」などは、青少年教育施設が伝統的に得意としてきた成果（態度変容）の1つであろう。また、事業にあって異年齢層との交流を有する点も、青少年教育施設が持つ特長の1つで、例えば「高校生とともに活動す

ることやフィールドワークは効果的」という声が挙げられている。その一方で、成長著しい青少年期にあって、わずかでも年齢層の違いは学習課題等のギャップが生じる。「課題に対してより自分事として捉えさせるためには、テーマに合った活動の場や実体験を多く設定する必要がある」という意見が出ているように、年齢層による体験の蓄積の差異が青少年に大きく影響することは、容易に推測できる。

さいわい、国立中央青少年交流の家をはじめとする国立青少年教育振興機構は、このような体験の蓄積の実態にかかわる調査データを豊富に持っている。しかし、この調査データの活用は、現時点では、経年変化の把握や相関分析などの傾向把握までに留まっている。もちろんこのような活用もそれなりの意味はあるが、これからの実践研究にあって必要となるのは、ある時点の観測データではなく、将来の予測データであろう。なぜならば、このような予測データを得ることこそ、実践研究として行うモデル事業をより効率的にさせるに違いないからである。その点にかかわって、最近の AI（特に生成 AI）の飛躍的な進歩は、上述の予測データの生成にあっても見逃せない。したがって、このような研究事業にあっては、生成 AI の活用による体験蓄積や事業成果などを予測する方法を“探究”することが、将来的には期待される。

9. 資料

- ・令和3年度から令和6年度にかけて実施した事業報告書

【執筆・編集・発行】

独立行政法人国立青少年教育振興機構 国立中央青少年交流の家

〒412-0006 静岡県御殿場市中畑 2092-5

TEL : 0550-89-2020 E-MAIL : fujinosato@niye.go.jp

担当 : 川名 雄一郎 (主任企画指導専門職)

大西 亮真 (主幹兼企画指導専門職)

川端 斗和 (事業推進係員)